Osaka University Knowledge Archive

Title	ブラジルのことばと文化の形成 : 移民の役割
Author(s)	鳥居, 玲奈; Rogério, Akiti Dezem
Citation	外国語教育のフロンティア. 2024, 7, p. 79-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94985
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論　文

ブラジルのことばと文化の形成 – 移民の役割

The Formation of the Brazilian Language and Culture – the Role of immigrants

鳥居　玲奈
Rogério Akiti Dezem

要約

The purpose of this article is to present some normative characteristics of Koronia-go, "the language practiced by part of the Japanese colony living in Brazil", in the historical context of Japanese immigration to Brazil, which began in 1908. Studying the historical process helps us grasp unique aspects, not only in the social realm but also within language like Koronia-go. It examines how communication, both as a tool of assimilation and a form of resistance, played a crucial role for Japanese immigrants and their descendants, primarily in the interior of São Paulo and Paraná states. Within this article, we aim to dissect key grammatical and vocabulary elements of Koronia-go, underlining their linguistic significance for the Japanese community in Brazil.

キーワード：ブラジル、移民、日本人、コロニア語、歴史、言語

1. はじめに

本稿の目的は、1908 年に始まった日本人によるブラジルへの移住といった歴史的文脈の中で、一部の日系コミュニティーで使用されていたコロニア語の特徴をいくつか提示することである。ブラジル社会への同化と統合の過程で、言語は、日本人移民とその子孫にとってコミュニケーションの側面だけでなく、アイデンティティの側面でも常に不可欠な要素であった。それゆえ、コロニア語の言語学的特徴を明らかにすることは、日系ブラジル人コミュニティにおける社会文化的関係をよりよく理解する上で重要であると考えられる。

2. 歴史的文脈

ブラジルは日本以外で最も多くの日本人人口を抱える国である。在ブラジル日本大使館の 2022 年のデータに基づくと、現在、およそ 200 万人の日本人とその子孫がブラジルに居住している。ブラジル地理統計院（IBGE）によると、その数は、ブラジルの人口のおよそ 11% に相当する [1]。

現在、ブラジルで日系社会が最も集中しているのは主にサンパウロ州とパラナ州である。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ブラジルの主要輸出品はコーヒーであった。当初、リオデジャネイロとサンパウロのコーヒー農園では、アフリカ人奴隷が労働力

として使用されていたが、1850 年の奴隷貿易の廃止により、その状況は一変した。奴隷にかわる労働力として、南東部のコーヒー生産者は、ヨーロッパ系移民を誘致することを決め、サンパウロ政府と協力して、ヨーロッパからの渡伯費用を負担することを申し出た。この計画により、1880 年代以降、主にイタリア人を中心とする数千人のヨーロッパ人がブラジルの南東部や南部に移住するようになったのである。

当時の政府、農業従事者、一部の知識人は、白人、ヨーロッパ人、カトリック系の移民や農業労働者を優遇していた。しかしながら、そのような理想化された移民がブラジルで直面したのは、黒人奴隷と同様に、かなりの低賃金で長時間労働を課せられたり、雇用主による頻繁な虐待を受けたりといった不安定な状況であった。そのため、イタリア政府は 1902 年にプリネッティ法令（Decreto Prinetti）を制定し、ブラジルへの移民支援を禁止した。同じ頃、日本では、明治政府（1868 年 -1912 年）の近代化政策により、人口増加、大阪や東京といった大都市への移住、農村部における貧困の増加といった一連の社会経済的変化がもたらされ、その結果、九州、北海道、そして 1879 年に併合されたばかりの沖縄から、より良い生活環境を求めて海外（ハワイやカリフォルニア）へ移住する人々が増加した（Dezem 2008）。

こうした中、ブラジルと日本は、1895 年にパリで日伯修好通商航海条約に調印し、外交的に緊密化した。その後、幾度かの試みを経て、1907 年になってようやくブラジル政府と日本政府はサンパウロ州への日本人移民の受け入れを認める条約に調印した。

公式には、1908 年 6 月に最初の日本人移民団（乗船者 781 人。そのほとんどが農業従事者）が移民船「笠戸丸」で神戸港からサンパウロのサントス港に到着した。当時、日本からブラジルへの旅は、50 日から 60 日ほど要した。彼らの多くは、サンパウロ州の内陸部に位置するコーヒー農園で働いた。笠戸丸はサントスまでたった一度しか運航しなかったにもかかわらず、その後、ブラジルにおける日本人移民史の大きなシンボル的存在となった。

1920 年代半ばまでおよそ 31,000 人の日本人移民がブラジルに入国した。1925 年から 1941 年までは日本人移民の流入が最も多かった時期であり、その数はおよそ 158,000 人で、1941 年までに入国した日本人移民総数の 67% を占めている（Suzuki 1995: 58）。総じて、ブラジルへの日本人移民の歴史は以下のように分類することができる。

移民以前	（1878 年 -1908 年）	ブラジルにおける「黄色人種」移民（中国人と日本人）の導入に関する議論
実験期	（1908 年 -1924 年）	サンパウロ州政府の補助金による移民
第一期	（1924 年 -1941 年）	日本政府による移民助成
戦争期	（1942 年 -1952 年）	移民の停止
第二期	（1952 年 -1973 年）	戦後の移民

大多数の日本人移民は数年間ブラジルで働き、ある程度の金銭を稼いで祖国に帰ろうと考えていた。しかし、当時、「一攫千金」はほとんど不可能な夢であった。わずか

な賃金で、コーヒー農園での労働時間は長く、移民たちは疲労困憊していた。しかも、移民たちが日々の生活で消費する食料、衣服、器具といったものの多くは、コーヒー農園にある唯一の倉庫で、通常よりも高い価格で購入しなければならなかった。その結果、彼らの借金はどんどん膨らんでいったのである。当時、これは、ほとんどの移民に共通する状況であった。

さらに、サンパウロのコーヒー生産者の多くは、いまだに奴隷意識を持ち続けていた。賃金労働者とはいえ、移民たちは働くことの難しさだけでなく、日々の待遇の厳しさや労働法の欠如にも直面していた。借金を抱え、長時間労働に追われ、身体的暴力を受けることもしばしばで、移民たちはこの状況から逃れる方法を模索していた。実際に、コーヒー農園での搾取が原因で、多くの日本人がアルコール依存症、夜逃げ、ストライキ、自殺といった行動に走った（Nogueira 1973）。

最初の数十年間は、言葉、宗教、食習慣、衣服、生活様式、気候などの違いが文化の衝突を引き起こした。多くの移民が日本への帰国を望んだが、コーヒー生産者は最後まで契約を履行するよう要求し、それを阻止した。

1910 年代以降、ブラジルで生まれた日本人の子供たちは、日系コミュニティによって設立された学校で教育を受けた。十分に整備されていない環境で日本製の教材を使用し、日本への帰国を目標に、母語としての日本語や、日本の歴史や文化を学んだ。多くの日本人は何年もかけて自分の土地を購入し、小作農となった。彼らはコーヒー、米、綿花を植え、蚕を飼い始めた。1910 年代から 1940 年代を通して、異人種間の交際から生まれた子供はわずか 6％程度で、日本人移民が非日系人との結婚を受け入れることはほとんどなかった。

第三世代は、1950 年代以降、ブラジルの日系人の特徴を大きく変えた。大多数が田舎を離れ、サンパウロ市を中心とした都市部に移住した。現在では、日系ブラジル人の 90％が都市部に居住している。日本人の子孫もブラジル人社会に溶け込むようになった。第二次世界大戦中にはブラジルの日本人学校が閉鎖されたため、日本人とその子孫はブラジルの学校に通い、ポルトガル語を学ぶことを余儀なくされた。それまでは、多くの日本人は小さな商店で野菜、魚、果物を販売していたが、時とともに活動分野を広げていった。

第二次世界大戦が始まる数年前、ジェトゥリオ・ヴァルガス（Getúlio Vargas）政権（1930-1945）は、ブラジルにおける移民を対象に同化政策を推し進めた。1934 年の憲法にはこの問題に関する法的規定があった。具体的には「国内のいかなる場所においても移民が集まることは禁じられており、法律によって外国人の選別、地域化、同化を管理しなければならない」といったものであった。この同化政策は、主にドイツ人、イタリア人、ユダヤ人、日本人移民とその子孫に影響を与えた。

混血人口は「白人化」されるべきとの政府の見解から、ヨーロッパからの移民が優遇された。それにより、非白人人口は徐々に白人化されていくものと考えられた。しかしながら、1920 年には日本人やドイツ人など特定の民族による閉鎖的なコミュニティが形成されたことから、ブラジルの混血人口を白人化させるプロジェクトの実現は妨げられた。そこで政府は、「ブラジル文化」に強制的に溶け込ませるため、これらの外国人コミュニティに対して行動を開始した。それはブラジルの全住民を単一の「民族

精神」のもとに統一するという支配的な考えに基づくものであった。戦争中（1942-1945）ブラジルは日本との関係を断絶した。そのため、日本の新聞や学校での日本語教育は禁止され、日系人にとってポルトガル語が唯一の選択肢となった。ブラジル北東部新聞社の調査によると、1939 年には日系ブラジル人の 87.7％が日本語の新聞を読んでいた（Lesser 2001）。ドイツ語やイタリア語の新聞もドイツとイタリアが日本の同盟国であったことから廃刊が勧告された。

ブラジル政府にとって日本人移民は、好ましくない、または同化できない移民として映った。彼らはアジア人であり、ブラジルの支配階層が望むような「白人化」のプロセスに貢献できなかったためである。この同化政策の過程で、日本人は他のどの移民グループよりもこの時期に課せられた民族文化的迫害に苦しんだ。ブラジルの法学者であり、歴史家でも社会学者でもあるオリヴェイラ・ヴィアナ（Oliveira Viana）は、日本人移民を「硫黄のようなもの、つまり溶けにくいもの」と表現した（Takeuchi 2008）。

1942 年 8 月にブラジルが日本に宣戦布告すると、日系ブラジル人社会は制限措置の影響を強く受けた。200 校以上の日本人学校が閉鎖され、日本からの短波放送の受信を防ぐ目的でラジオ機器が押収された。日系企業の資産も差し押さえられた。日系ブラジル人は、たとえタクシー運転手であっても、自らの敷地内で自動車やバスや貨物自動車を運転することを禁止された。日本人に雇われた運転手は、政治警察（DEOPS）の許可を得なければならなかった。何千人もの日本人移民がスパイ容疑で逮捕された。隣人同士の不和や借金の取り立て、さらには子供同士の喧嘩に起因する「国家安全保障に反する活動」に関する匿名の報告も数多くあった。芸術関連の集会やピクニックに出かける際ですら「不審な行動」をとったとして逮捕されることもあった。1943 年 7 月 10 日にはサントスに住むおよそ 1 万人の日本人移民とドイツ人移民は、24 時間以内に家や会社を閉鎖し、ブラジルの海岸から離れるよう命じられた。その時の避難民の大半は日本人であった。警察は事前の警告なくこのような行動を起こしたのであった。

戦後、1946 年の国民議会において、医師で政治家のミゲル・コウト・フィーリョ（Miguel Couto Filho）が、年齢や出自を問わず日本人移民の入国を禁止する憲法改正案を提出した。最終投票では、賛成 99 票、反対 99 票で引き分けとなった。当時、制憲議会の議長を務めていたフェルナンド・デ・メロ・ビアナ（Fernando de Melo Viana）上院議員は、憲法改正案を否決する「ミネルバ票」を投じた。これにより、1946 年のブラジル憲法では、わずか 1 票の差で、日本人のブラジルへの移住は禁止を免れた。その後、1953 年に日本からブラジルへの移住は正式に再開された。

数十年間、特に 1910 年代から 1940 年代にかけて、日本人とその子孫は一般的に異質な文化に属し同化できないものと考えられていた。当時の移民は、コーヒー農園に必要な安価な労働力の予備軍としてしか扱われていなかった。日本人は民族的に「ブラジル人」の形成に否定的であるというこの考えは、その後の数十年で変化した。1970 年代、日本は世界で最も豊かな国のひとつとなり、近代化と進歩の代名詞となった。同時期に、多くの日系ブラジル人が社会経済的に大きな成功を収め、ブラジル社会で非常に重要な役割を果たすようになっていった。日本経済の著しい発展と、1970 年代から 80 年代にかけての二世と三世の台頭により、日系ブラジル人は、ブラジルに

おける社会的名声を獲得し、移民初期の数十年間の人種差別的で否定的な考え方とは大きく対照をなすようになったのである。

このように、日本人移民とその子孫は、100 年以上の歴史の中で、異文化関係を通じてブラジル社会に多くの貢献をしてきた。次章では、こうした関係の重要な一例として、言語という社会文化的要素について検討したい。

3. ブラジルポルトガル語と日本語の言語接触

前章でも詳述したように、19 世紀後半以降、ブラジルにはヨーロッパやアジアからの移民が数多く流入した。その結果、当然のことながら移民の諸言語とブラジルポルトガル語との間にも接触が生じた。

これらの移民の言語による影響は、現在のブラジルポルトガル語の形態統語面にも現れていると主張する研究者もいるが、基本的には語彙の面にとどまるとするのが一般的な見解である [2]。移民の置かれていた状況からも容易に推測できるように、その影響は、日々の生活に関連する語に顕著に表れている。例えば、食生活においては、イタリア語由来の macarrão（マカロニ、パスタ）、pizza（ピザ）、panetone（パネトーネ）、スペイン語由来の paella（パエーリャ）、talharim（パスタの一種）、アラビア語由来の quibe（キッバ）、esfiha（エスフィーハ）、日本語由来の yakisoba（焼きそば）、sashimi（刺身）、shoyu（醤油）、ajinomoto（味の素）、yakult（ヤクルト）、miojo（インスタントラーメン）などのような語が挙げられる。これらはいずれも移民が集中しているサンパウロ州を中心に食されるものばかりである。また、食文化以外でも、別れの挨拶表現としてイタリア語起源の tchau、金銭を意味するスペイン語起源の grana、日本語起源の ofurô（お風呂）や quimono（着物）といった語も使用されている [3]。

本章では、日本語とブラジルポルトガル語との言語接触に焦点を当て、なかでも一部の日系コミュニティーにおいて日常的に使用されていたコロニア語 [4] について概観する。

細川（2008:145）は、コロニア語を「ポルトガル語彙を頻繁に借用した日本語の 1 タイプ」と定義している。同著者によれば、コロニア語の話者は日本語を話す能力がしっかりした人に限られているため、大半は一世や準二世 [5] であったが、三世や長期滞在者にまで及ぶこともあったという。以下はコロニア語の一例である。細川によると、このようなポルトガル語を多用した日本語は、ユーモアと誇りをこめて「コロニア語」と呼ばれるようになったという。

(1) 昨日**エラ**は**ドルジカベッサ**で学校を**ファウタ**したんよ。　（久山　2000: 9）
“Ontem ela faltou à escola por causa de dor de cabeça.”
「昨日、彼女は頭痛で学校を欠席したんよ。」

上記の用例でカタカナ表記になっている箇所は、それぞれ ela（彼女）、dor de cabeça（頭痛）、faltou（欠席した）に該当するポルトガル語の語彙項目を借用したものである。この用例からもコロニア語とは、日本語の中にポルトガル語からの語彙項目を頻繁に借用したものであることがわかる。

ここで「頻繁に」と表現されているのは、「彼女」「頭痛」「欠席した」のように本来であれば日本語で十分に表現が可能である語彙項目であっても、あえてポルトガル語からの借用が起こっているためであろうと考えられる。

馬瀬（1986）によると、初期の日系移民は、日本語には存在しなかった語彙項目や存在しても当時はそれほど一般的ではなかった語彙項目にポルトガル語からの借用語を使用することが多かったという。例えば、カフェ（café「コーヒー」）、メーザ（mesa「テーブル」）、カーマ（cama「ベッド」）などがその代表的な例である。他にも「台所」を意味するコジーニャ（cozinha）なども、当時の日本の台所とブラジルの台所では、物理的な特徴の違いだけでなく、一方では靴を脱ぐが他方では靴を履いたままであるとか、一方では醤油の匂いが漂うが他方ではニンニク入りの豆料理の匂いが充満しているといったような違いも含めて、移民はブラジルの台所のことを「台所」とは呼ばずに「コジーニャ」と呼んで両者を区別していたという。

日本とは大きく異なる環境で生活をしていた彼らの目には、台所の例に見られるように、既知のものでも異なる新たなものと映っていたのであろう。その新たな事物にポルトガル語の語彙項目を当てていき、結果的に過度な借用に転じたのではないかと推察される。

通常、借用語には新しい事物や概念を表す名詞が多く、必要に応じて借用先言語内で接辞を付与することにより、その他の品詞に派生する。そのため、借用元言語の形容詞や動詞や副詞がそのまま借用先言語に取り入れられるケースはそれほど多くはない。ところが、コロニア語には、上記の例でも確認できるようにポルトガル語の人称代名詞や動詞だけでなく、以下の例のように形容詞や副詞なども数多く借用されている点で興味深い。

(2) あのセニョーラは**ヒッコ**だ。
“Aquela senhora é **rica**.”
「あの女性は裕福だ。」

(3) **バスタンチ**ください。
“Dê-me **bastante**.”
「たくさんください。」

ここからは、コロニア語に見られるいくつかの形態統語的特徴に絞って概観していく。

日本語の母語話者としてコロニア語を耳にした時、最も印象に残る特徴の 1 つが上記 (1) にも見られる複合動詞の使用である。これは、ポルトガル語の語彙項目に日本語の「する」を付加した形で、以下のようにサ変動詞として使用されるものである。

(4) アジューダする（=ajudar「手助けする」）
(5) アルモッサする（=almoçar「昼食をとる」）
(6) リンパする（=limpar「掃除をする」）

(4) の用例だけを取り上げると、一見、ポルトガル語の名詞 ajuda（手助け）に日本語の「する」が付加されただけの単純な構造のように見受けられる。しかしながら、同種の用例を複数観察すると実はそうではないことに気が付く。仮に名詞であれば、(5) は「アルモッソ（almoço）する」となるべきであるし、(6) は「リンペーザ（limpeza）する」となるはずである。

この語形成について半田（1972: 81）は、ポルトガル語の動詞の原形から語末の子音 r を脱落させ、日本語の「する」をつけて日伯混合語を作成すると述べている。半田の主張通り、ポルトガル語の動詞の原形から子音 r をとった形だとすれば、強勢の位置は語末の子音 r の直前に来る母音に置かれるため、「アジュダーする」「アルモサーする」「リンパーする」となるはずである。しかし、実際には、いずれも語末から数えて 2 つ目の音節に強勢が置かれ、日本語では「アジューダする」「アルモッサする」「リンパする」ように発音されるのである。この事実から、上記の複合動詞は、ポルトガル語の動詞の原形から形成されるのではなく、直説法現在 3 人称単数形に「する」を加えたものであると断言できるであろう。

そのように考えるには他にも理由がある。それは、直説法現在 3 人称単数形がブラジルポルトガル語においては最も使用頻度の高い語形であるということである。

ブラジルポルトガル語では、形式上、動詞の 3 人称単数形で意味上の 2 人称単数・3 人称単数･1 人称複数を表すことができるだけでなく、非標準的な言語使用も含めると、2 人称複数や 3 人称複数をも表すことが可能になる [6]。したがって、最も生産性の高い語形であるといえる。この最も一般的な語形、すなわち無標の形に「する」が付加されていると捉えると、特異に見えるコロニア語のサ変複合動詞は、音韻的にも形態的にもごく自然な語形成によるものであることがわかる。仮にこの語形成が名詞 +「する」であれば、それぞれの名詞によって語形や強勢の位置が変わるがゆえに決して生産的とはいえないであろう。

工藤他（2009）には 2003 年にブラジルのサンパウロ州において 48 名の日系人を対象に行った談話収録調査が記録されているが、その談話をつぶさに観察すると以下のような用例が確認できる。

(7) 「あ、**almoça** しに。」
「ああ、**almoça** か **janta**。しゃべりに。こっちに来るか、あっちに ...」 (p.289)
(8) 「じゃ、その、例えば日曜日の、その、**almoça** に行く時に、その、お父さんの irmão も来たりするんですか？」 (p.291)
(9) 「**Escolha** ね。」 (p.277)
(10) 「お姉さん、1 つ banco に **trabalho** しとる。」 (p.290)

いずれも談話から該当する箇所のみを抜粋したものである。(7) や (8) に見られる almoça と janta は、それぞれ「昼食」「夕食」の意味で使用されている。これらの名詞は、ポルトガル語ではそれぞれ almoço と jantar（またはくだけた言語使用域では janta）となるが、コロニア語では直説法現在 3 人称単数形の almoça と janta が、あたかも名詞として用いられているように見受けられる。

一方、(9) では、コロニア語のサ変複合動詞の規則に則れば、第二活用動詞の escolher（選ぶ）は「エスコーリェ（escolhe）する」となり、それを名詞化させるのであれば、escolhe となるはずであるが、実際にはそのようにはならず「選択」を意味するポルトガル語の名詞 escolha が用いられている。また、(10) でも、動詞 trabalhar（働く）の直説法現在 3 人称単数形 trabalha から「トラバーリャ（trabalha）する」となるはずが、名詞 trabalho が用いられているのが確認できる。このことから、コロニア語では、almoça や janta のような動詞から派生した擬似名詞と escolha や trabalho のように本来のポルトガル語の名詞が併存しているようである。

さらに調査すべく工藤他の談話資料からこの複合動詞の用例を全て抽出したところ、以下のように第一活用動詞のみであった。第二活用動詞や第三活用動詞の用例だけでなく、不規則動詞の用例は一例も確認できなかった。

工藤他（2003）から抽出したサ変複合動詞の一覧

acompanha する（同行する）	cozinha する（料理する）	namora する（付き合う）
almoça する（昼食をとる）	engorda する（太る）	pesquisa する（調査する）
aumenta する（増加する）	janta する（夕食をとる）	separa する（別れる）
casa する（結婚する）	limpa する（掃除する）	valoriza する（重視する）
conserta する（修理する）	manda する（命令する）	visita する（訪問する）

今回分析した談話にたまたま第一活用動詞しか表れなかった可能性は否定できない。なぜならば、別の文献では「come する（食べる）」のような第一活用動詞以外の用例も記録されているためである。そもそもポルトガル語の動詞は、数量的には第一活用動詞が最も多く、第二活用動詞、第三活用動詞となるにつれその数は大きく減少する。先ほどの (9) の用例からもわかるように、コロニア語でも同様に、第二活用動詞と第三活用動詞のサ変複合動詞の数はそれほど多くなかった可能性が高いと考えられる。

不規則動詞については、久山（2000:7）も「ポルトガル語の不規則動詞には借用が起こりにくい。これについては、動詞の活用の難しさが影響していると考えられる」と述べている。そのため、原則的に vai する（行く）、tem する（持つ）、vem する（来る）、dá する（与える）といったような不規則動詞による語形成は起こらないと予測される [7]。

続いて工藤他（2003）から形容詞の用例を抽出したところ、用例数はそれほど多くはないものの男性単数形が好んで使用される傾向が窺えた。ポルトガル語の形容詞は、修飾する名詞の性数に応じて、男性単数形・女性単数形・男性複数形・女性複数形のうちのいずれかが選択される。しかし、コロニア語では、上記 (2) からもわかるように、女性名詞で単数形である senhora を修飾しているにもかかわらず、形容詞は女性単数形の rica とはならず、男性単数形の rico となっている。

この点について馬瀬（1986:39）は、日系二世以降の人々は以下のように言うことが多いと述べている。

(11) クリチーバの町**ボニータ**ねえ。
“A cidade de Curitiba é **bonita**, né?”

これは「町」を表すポルトガル語の語彙項目 cidade が女性名詞であるがゆえに、呼応の原則から形容詞も女性形となっている例である。このように、二世以降になるとポルトガル語の干渉が徐々に大きくなっていくことが報告されている。

文法上の数についても同様のことが言える。例えば、以下の用例の強調箇所は、ポルトガル語の規範では、それぞれ centavos, reais, línguas といった複数形になるが、(12) ～ (14) に見られるコロニア語ではいずれの場合にも単数形が用いられている。

(12) 50 **centavo**, un（ママ）real だからね。 (p.279)
「50 センターボ、1 レアルだからね。」
(13) cem **real** とか dozentos（ママ）**real** とかね、そんなに大きな金じゃないから。 (p.279)
「100 レアルとか 200 レアルとかね、そんなに大きな金じゃないから。」
(14) É. Pelo menos três **língua**, né? (p.277)
「そうね。少なくとも三言語ね。」

このような文法上の数の不一致は、ブラジルポルトガル語においてもよく見られる言語現象である[8]。くだけた言語使用域ではポルトガル語の母語話者でも meus irmão（私の複数の兄弟）のように数を一致させずに発言することはしばしばある。それに対して、meu irmã（私の 1 人の姉または妹）のような文法上の性の不一致はまず起こらない。文法上、性の一致と数の一致は同じレベルで捉えられがちであるが、厳密には、後者に比べて前者の方が名詞句内における呼応の原則が適応されやすいといえる。このことからも、コロニア語で生じている性数の一致および不一致はごく自然な言語現象であることが明らかである。

最後に、ポルトガル語の干渉によって生じた日本語の「誤用」について見ていく。以下はいずれもブラジルの日系コミュニティーでしばしば耳にする表現である。

バスで歩く	(= バスで行く)	por. andar de ônibus
ゴミを投げる	(= ゴミを捨てる)	por. jogar lixo
車を引っ張る	(= 車をどける)	por. tirar o carro
道で落ちる	(= 道で転ぶ)	por. cair no chão
卵を叩く	(= 卵を泡立てる)	por. bater ovos

これらはいずれもポルトガル語の動詞を「誤って」日本語に訳した結果、生成された表現である。例えば、「バスで歩く」というのは、「バスの中を歩く」のではなく、「バスで行く」の意味で用いられる。ポルトガル語では andar de ônibus と表現するが、動詞 andar の最も基本的な語義「歩く」をそのまま転用してしまっていることからこのよう

な「誤用」が生じているのである。これらの表現は日本語では「誤用」とみなされるものの、コロニア語では括弧内に示した意味で何の違和感もなく使用されていたというのは興味深い。いずれの表現も基本的な語義の転用から新たな表現が生み出されている点で共通しているといえる。

ここまでブラジルポルトガル語と日本語の言語接触、とりわけブラジルの日系コミュニティーで使用されていたコロニア語の形態統語的特徴について考察した。本稿ではサ変複合動詞の形成や形容詞の性数というほんの一部の言語現象に絞って検討したが、これらは日系移民による独自の語形成ではなく、いずれも生産性のある語形成によるものばかりであることが確認できた。

注

1 本稿の執筆分担は次の通りである。要約・1 章・2 章は Dezem、1 章・2 章の日本語への翻訳ならびに 3 章は鳥居が執筆。

2 https://www.gov.br/turismo/pt-br/assuntos/noticias/114-anos-de-japao-no-brasil

3 文法学者であるシルベイラ・ブエノ（Silveira Bueno）は、ブラジルポルトガル語に見られる nós faz や nós diz といった非標準的構文は、noi si fa, noi si dice のようなトスカーナ語や標準イタリア語で典型的な構文から影響を受けたものとしている。これに対し、イラーリ & バッソ（Ilari & Basso）は、ブラジルに渡った多くのイタリア系移民は標準変種の話者でなかったという理由からその説を否定している。

4 （Ilari & Basso 2014: 140）

5「コロニア語」は、ポルトガル語の colônia から派生した語である。「コロニア」という語は最初「アリアンサのコロニア」「バストスのコロニア」のように、日本人の集団入植地という意味であったが、終戦直後から、日本移民とその子孫を含む日系コミュニティ全体を指す用語に転用されていったという（細川 2008:10）。

6 思春期ごろまでに日本からブラジルに移住した世代のことを指す。

7 例えば、Tu fala（君は話す）、Você fala（あなたは話す）、Ele/Ela fala（彼／彼女は話す）、A gente fala（私たちは話す）、Vocês fala（あなたたちは話す）、Eles/Elas fala（彼ら／彼女らは話す）のように。

8 久山（2000:8）によると、まれに動詞 pôr の接続法現在形 1 人称および 3 人称単数形を使って「ponha する」ということもあるという。この点については、半田（1971:81）にも同様の記述がある。

9 （鳥居 2018:1-2）

参考文献

（外国語文献）

Bybee, Joan.
2015　Language change. Cambridge University Press, Cambridge.

Dezem, Rogério
2008　“Um exemplo singular de política emigratória: subsídios para compreender o processo

de formação dos núcleos Ijûchi de colonização japonesa no Estado de São Paulo (1910-1930)", in Francisco Hashimoto, Janete Leiko Tanno & Monica Setuyo Okamoto (orgs.), *Cem anos de Imigração Japonesa. História, Memória e Arte*, 1ed., v. 1, Editora UNESP, São Paulo, 151-166.

Ilari, Rodolfo & Basso Renato

2014 *O português da gente*, Contexto, São Paulo.

Lesser, Jeffrey

2001 *Negociação da Identidade Nacional: Imigrantes, Minorias e a Luta pela Etnicidade no Brasil*, Editora UNESP, São Paulo.

Nogueira, Arlinda Rocha

1973 *A imigração japonesa para a lavoura cafeeira paulista (1908-1922)*, Instituto de Estudos Brasileiros/USP, São Paulo.

Suzuki, T.

1995 "Imigração Japonesa no Brasil" in *Revista do Instituto de Estudos Brasileiros*, vol. 39, IEB/USP, São Paulo, 57-65.

Takeuchi, M. Yumi

2008 "A comunidade nipônica e a legitimação de estigmas: o japonês caricaturizado", in *Revista USP*, vol.79, EDUSP, São Paulo, 173-182.

（日本語文献）

工藤 真由美・森 幸一・山東 功・李吉鎔・中東 靖恵

2009 『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房、東京。

久山 恵

2000 「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用―その形態と運用」『社会言語科学』3 (1)、4-16。

鳥居 玲奈

2018 「ブラジルポルトガル語における名詞句内の数の一致」『EX Oriente』25、1-21。

バイビー、ジョーン（小川芳樹・柴崎礼士郎（監訳））

2019 『言語はどのように変化するのか』開拓社、東京。

半田 知雄

1972 「日本語会話に、とり入れられたポルトガル語」『コロニア文学』17、80-82。

細川 周平

2008 『遠きにありてつくるもの』みすず書房、東京。

馬瀬 良雄

1986 「ブラジル便り―ブラジル日系人の日本語」『言語生活』418、36-45。